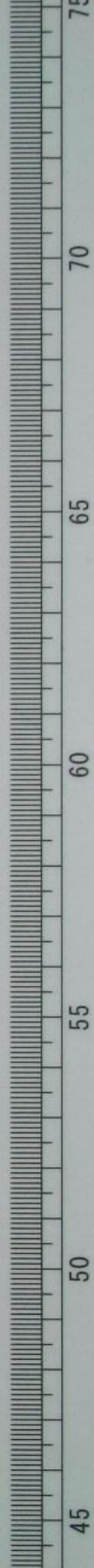


帝朝文鑑

利  
99  
2



門類  
第 99  
卷 2



本朝文鑑卷二



賦類

硯賦

既望賦

涼賦

將暮賦

讀將暮賦

日和山賦

悠然賦

好色賦

行類

水波行

石鏡行

吟類

雨夜吟

曲類

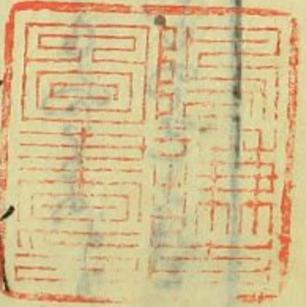
於曲

田舍曲

東曲

舞子曲

大月天盤

























と下りていふに月をいふに讀む。ある取合のふね  
ありて命と稱しと稱するその名の扱はとて  
ふれと居るにや。ふねのるにと讀作く  
諸書にのり陣圖とありて神機妙算の謀を  
とくし。常柱のやふに将軍とほくらて善戦播  
将の法とありて早急を油断を敵のやま  
儒師をさとと讀む。まき千日すのさばあり  
十一月の将軍とふれに孔子の言を述と  
系載してはとてをさうの或や般軍上のあそひ  
とていふに力のも勝るといふくはぬに

靴といふにさねいふにゆめをいふに  
又と對般の法といふに

讀將具賦

村野航

舟中一抽の巻物あり野れ百里の天より  
下龍王の長髪とやふに扱れ一尺の船  
水馬の蹄は月がくし海に縦横自在を海津妻  
切下ふるふいとよの衣と飾して紅霞の情と  
はくもる也これとてよき事船を鶴牛の角と  
あつたふてかすに敵ありとてあつたり大將の



こそれをこゝへはよむ人のこゝとていふは、  
し割陸の人と勝つていふ事と訊かぬか、  
服は遠の族らに負つて急件と申はしや、  
よの冷きとふくは、わが事とていふは、  
動つていふは、おの情とわかれ、  
とるを遠く大般若の真諦とて、  
の心賦とていふは、

任云此の篇ハ前賦ノ註チカラ季チク故夏古詔ヲ解スルニ  
之ニハ句對アリ意對アリテ體ハ賦體ク尺自成セリ註

應用自在ト云し是ハ前公ト傳類ヨリとて、  
ヲ題セリ然レハ世ハ篇ノ題ハ始ニ是也、  
五般ノ情ヲ喩ヘ儒公ニ思ノ理ヲ、  
輕シトハ子孟父ト曰毫ノ楚ク、  
或ハ保元章帥トハ和ニ信賴ノ、  
師ヲ云元但シ先帝前御ノ、  
和漢ニ智勇ノ西士ヲ云イ、  
ニシテむも最悪ヲ三罪ナルナリ、  
金銀ノ情ヲ青白クシテ、  
ノ一對ニ其レヲ教ヘハ、  
其名ヲ云クテ是ヲ為トハ、







何れもいふに似たりとて  
唯しつゝ悠々たるのこ  
此のまに弁のまもあ  
らまのあつたの流る  
とつひの人のとつあ  
あつたをゆき人と  
とまねとあつたあ  
もつたねえとあつた  
あつたねえとあつた  
唯しつゝ悠々たるのこ

和云世賦ハ望望語格ミテ然モ文賦ノ瀏亮ヲ尽セリ是ハ此ノ因  
悠然言ハ或ハ字ノ潤多ク用イ或ハ字ノ且此ヲ用テ總テ  
其ノ詞ヲ思望ルニ子モ其用ヲ辨ケ入世等ハ渾文ノ尽サレ  
所ニノ言ニ和文ノ風格ヲ知レシ但シ世君主庵ハ賀ノ金城ニ在  
テノ野万子ノ弁莊ナリむモ水竹ノ畫居ニ然レモ名ヲ盡シ子  
トハ例ニ竹師ノ陰号ナラウ事ニ在テヲ讀ム時ノ内題トソ

和色賦

三無好法師

あつたねえとあつた  
あつたねえとあつた  
あつたねえとあつた









祝し或ハ鳴ニ照ノ子ハ照鳴ノ倒将ナリ或ハ蓬坂ニ響身ハ鶴ノ  
虚言ヲ合セテウヤマノ園ハ臺字ノ縁ナリ或ハ控鳥ニハ  
西行ノ子ヲ滿リ奉袍ニ東坡カ詩ヲ合セテ例ニ和漢通  
ナリ去レハ東坡カ布穀ノ詩ニ動我朕布袴トハ其鳥ノ鳴音  
トハ去レハ奉袍ト云イタナリ或ハ三京ノ名ラ云ハ御所  
五歳ノ詞ニ難波曲トハ酒ノ名ナリ然レハ西王命カ四念四語ニ  
提在皇廬沽美酒ト啼ク身ハ日本ニ柳掃ノ類ナリト啼トハ  
和音ノ詞ニ合セテ鳥ノ俗語ヲ鑿タル多ク三文章ノ虚言ニ  
又レシ或ハ團扇ニ柄トマケテ子鳥ハ雜物ノ扱ナリト涉子鳥  
ノ扱ナリト總テ五歳ノ詞ニハ子鳥トナリト二用ナリト

多クナリハ其言ハ子鳥ト云イテ其言ハ當時ノ俗言ナリ  
五歳ノ詞ニ早言ニ效クテ多クモ四五云ハナリ或ハ我朝ノ松ニ鶴トハ  
年ノ子鳥ニ洛陽ヲ祝シテノ子鳥ニ武城ヲ祝シテモ子鳥ノ  
カトナリ或ハ子鳥ノ祝ハ諸ノ方歳ノ結語ニヤラタラシトハ舞  
收メテラ合ハ皇帝ノ御制ニ寄セテ家ノ庭電ヲ祝イタル誠ニ  
同出ナリ方歳行ナレ但シ華表人ハ我師ノ隱各ナリト文章奇怪  
ヲ憚リ三五ハ丁零カ鳥ラ云ハナリト

西行

沈氏文

むしはよきおれはしれて 西行と神とをいふ





ふふふと竹とくくく  
こーみおのあふゆきとーとおかりらるる  
うれお母のちよこく

和云世ニ奉ハ能登ノ曲ニ總テ之ヲ路ノ向ニ詠詠ス律ニ  
下里巴人ノ類ナラシカト樂府ノ古風ニ似テ古今竹風情  
ヲ添ヘ弄禪ニ定ヒ佳レト俚語ノ中ノ風雅ノ所見ニテアリ  
「モ云キナリ」此ハ都曲ニ去クノ法ニシテ田舎曲ハ體挫ノ  
格ナラシキ白カク五七言ト成等ニ七五ノ拍子ヲ知ルニシ

東曲

と御

わんやんやんひやらととと  
らとととと

和云曲ハ真ノ由指カミテハトハ能存ラズキ子ニハトハ不守ラズニ總ニ  
ニニ路はノ字ヲ耀ハ名モアレニ儀ノ年貢カ氣毒トナリ但シ生仏ハ  
事用ノ産頭ニテ能親ノ樂府ヲ詠リト徒然ノ為辨折ニ世古アリ

西舞子曲

と御

さうらねの歌のんそとよとさうらねの山の山後も  
くふりれてお神さうらねの山さうらねの山と山  
さうらねの山さうらねの山さうらねの山さうらねの山



乃存美長し世世之稿ニ過キヨリ成ハ流モ因スヤトハ一ニ御中ノ  
短詔ニシテ君見スマ石内スヤノ例ニ古學ノ常詔ナリ然ルニ  
秋子ヲタキテハ後抱子<sup>タテ</sup>帰ニ青嶂<sup>アサヒ</sup>後ト云ル古詩ノ意ヲ  
向スヤト舞子ノアトキヲ諱メシナリ但シ世ヲ刃一以下ハ左ニ  
柏子ノ向ラ後キテ例ニ委吉ク曲ト見ル況ヤ柳子ニ雲<sup>クモ</sup>柳ヲ  
對シテ佳者ノ名ニ居ランヨリ疎<sup>ス</sup>葉ノ安キニ眠<sup>ユ</sup>ラニト先賢  
ノ詞ヲ取言セテ朝<sup>アサ</sup>ニ暮<sup>ユフ</sup>四ノ世ノ様ラ云ル世等ハ和<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>章<sup>ニ</sup>  
ヲ傳ヘテ世ノ榮<sup>ニ</sup>落<sup>ニ</sup>教<sup>ヲ</sup>誠<sup>ヲ</sup>忘<sup>レ</sup>シケル誠ニ天地ノ情ヲ動<sup>ス</sup>誠ニ  
鬼神<sup>ニ</sup>モ注<sup>ス</sup>レム一

本朝文鑑序之

引類

富士引

手羽引

謠類

雨乞謠

石搗謠

辭類

風俗辭

山姥辭

艶詞

戲仰辭

懽<sup>ハレ</sup>稚子<sup>コ</sup>辭

夕暮辭

鳥返辭

箴類

雨居箴

猫恋箴

引類

富士引

并奇

山部赤人

あぢけらのまねけし神さひてさくくわに駿河あ  
わのうねとあまのふりうけんねらむらにれ歌  
かくろひての月のえんもんもあまのめいひん  
あくけおをちゆりさかすはぶりしはさゆり  
不らぬのさうねら

臣子北浦よりしらぬるねらまらぬ

あーのさねらやうらぬりき

ね云引ハ諸所ニ分明ナラス去レト詩強ニ似ル抑ラテ序引ト

系ハテ註シタレハ引ハ決レテ詩ニキラ後ニスト云ハ題註ノ字下  
急ナランハ故ニ詩人玉屑ニモ始末ヲ載ルヲ引ト云テ彼ハ詩引  
ト系ハ註セリ然レハ万葉ノ題名ニ山部赤人等々山  
歌一者<sup>并</sup>短奇トアルハ之明ラ体トシ後ヲ用トセリ去レ  
長短ノ遠近ニアリトテ同シキヲ二首ヲ子テ系ハ歌トハ如何  
強テハ長短ノ奇ニ首トハ云ハシマハ長奇ヲ引ト見テ短奇  
ヲ後ニナセル時ハ誠ニ幸朝ニモ引類アリテ是ラ古今ノ文體  
トナサハ選者ニ一部ノ眼力アリト稱スレ況ヤ結文ノ詞ラレニ  
云クワキ行シ富士ノ山ト次ノ短奇ニ云クワケタル不思議ニ序  
ノ兩格ヲ二系テ和漢冥合ノ引ト云ハシ











和云此一篇備ハ辭類ノ註解トリルニシテ然レニ楚辭ト云付ハ  
 楚國人ノ詔音ヲ字セシ辭其ハ固東ニハイト云イコトト  
 云イ都ニハサセ氏アンス氏助語ハ固々ノ風俗ナリ去レハ序  
 モリ辭モ句讀ノ長短ヲ調ヘルハ詩賦ノ行ノナラヌ  
 七七題ノ外ニ付格ヲモテテ善ク又類ヲ漏ラサレナリ  
 去レハ頌城ノ詞ニハワシモヨクモ彼ノ平語ナカラバ徒ニヒルト云イカク  
 層ニカルト云ヘル例ニ凡雅ノ意ニシルナリ次ニ馬ノ詞ハ錢異  
 名ヲ彼ノ凡俗ニシテナク又ラ崔ト云イニナラ固ト云ヘル行ノ  
 一字ハ例ノ凡雅ナリ或ハホコシモ通ズ又トハサノコナラ又ト  
 云フ百ヲホツトワメタハ助語ト然レテモ遠段モ言ニ知レ

山鏡辭

一休和尚

たつと山鏡をよとよとつとをたつとあきつとわねと  
 せとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 一念化しての思ふとありて月ふとまふとと邪心一如  
 とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 あり頗恨あは言提あり佛ありあはととととととととととととと  
 あねと山鏡とあり佛とととととととととととととととととととと  
 何人何人あはとととととととととととととととととととととととと







狂云此篇ハ光廣卿ノ南馬ニ入湯付ノ筆下トテ  
行次ニ書傳テテ見角ノ語モ直ニキカ然レニ此篇ノ題名  
結文ニ綺語ノニ字ヲ見テ此ノ字ヲ以テ題セシカ中  
ノ首ヲ辭ト見レハ古ノ漢文ノ漁父辭ニ似テ之則後ニ  
序詞ノ文勢アレハ此等ノ漢家ノ辭ト云ハシ但シ此卿ハ  
和齊ノ家ナカラ此等ノ字格モ遊ヒ玉ヘ誠ニ文法ニ  
諫カヨリ至極實ノ自在トハ稱スレ

情捨子辭

芭蕉庵

豎酒の園より川みぢりりよと川くうらあつ捨

あつれきよはありいさやけ川のつらあまこし  
のけとまのあまきしあまはくらの命たつた  
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと  
らんあまやまあれんし様よりあまやまあま  
後とず人様よまの風のうま  
いよまやけらあまうまれらあまあま  
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと  
あまよまよとまよとまよとまよとまよとまよと  
狂云此辭モ漁父ノ文勢ナカラ捨子ニ似テ風イカニト  
向ヤケテ如何ニヤト序詞ニツケタレ但シ辭體ノ一体

倭文ニ辞ヲ立ル時ハ千般法格凡レシ誠ヤ富士川ノ瀬ヲヤシ  
浮世ノ波ニイナリ夕九北川ナリテハ夏ニ知レシト秋ノ露  
ハ深中ノ奇ヲ借リ父母ノ情愛ハ在子ノ天性ヲ云凡例ニ  
和漢ノ情達シテ是ラモ漢家ノ詩ヨリ倭文ノ助語ヲ用得タリ  
ト云ハレ

夕暮辭 子序

東花七坊

いーるあり湖東の人と送ると武に又世内  
ふとあーらと東に宿ふ人ありてけ別とあは  
けあにや海にたぬ人たり人ハ心ハせぬを并所  
ありはかこむむいーるのほろむあつ唐土に

丁詞とて千送の人とらむ然とて送る人といふ  
そのなるとて年々あつ人あつやけりてあつ詞の  
うあつと送らあつ人のあつはとらむあつと  
いふ旅あつあつ人ハ一針の傳とてやて上高の  
妻よとあつらつて宿の人のあつとらむいーる  
あつて作ら旅あつあつとあつとらむあつとら  
のし春秋とらむとていむいむいむと武士の旅  
けいけららららららららららららららららら  
かーいあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
皆旅とて旅とあつとあつとあつとあつとあつと

知不やけのうにあつらへ武陵二百里の藤よあやむきり  
 ちん言らねよふいけんいふさうにわーまらふま  
 みうまへくけいけのなまふまこ秋よらぬの月と  
 ま二百里のおねぬ人のふしあひまらぬの月とあひ  
 ちて新路の角と命をうけぬ人あふんやめふあひ  
 い人をあつて梅のま子とわやふ花坊う人あふん  
 こそよ支梅の説のふと梅のむのねとあふん  
 ち梅のに南よをいけふあふん酸の味とあふん  
 馬祖を倒のあふんあふんあふんあふんあふん  
 ちてあふんあふんあふんあふんあふんあふん

あけくさうけいけあふんあふんあふん

梅のうやあふんあふんあふんあふんあふんあふん  
 ちれまらあふんあふんあふんあふんあふんあふん  
 ちのうとあふんあふんあふんあふんあふんあふん

在云此辞八十二句ありて鶴立二句ハ発語ナレ八十二句ニシテ  
 ち韻ナルキニ是ハ二句合セテ一句ノ意ナレ故ニ六句ニメコ韻  
 ナリ是ラモ叶龍ノ一格ト見ルレシ去レハ其ニ序ハ老子ノ詞ヨリ  
 中比ハ毛詩ノと秋ヲ摘ミテ和ニ仲磨カニテ奇セ漢ニハ  
 王維カ詩ヲ合ハス梅子ハ傳灯ノ故古ニシテ師才ノ事ノ称名  
 ニヤ總テハ西行ノ東下リニアラテ定ニ水知ノ山屋ノ伝



角のつらふはふてきめれの田の井あふせものつらふは  
あふふの後のもよりのあふふのつらふはあふふのつらふは  
あふふのつらふはあふふのつらふはあふふのつらふは  
あふふのつらふはあふふのつらふはあふふのつらふは  
あふふのつらふはあふふのつらふはあふふのつらふは  
あふふのつらふはあふふのつらふはあふふのつらふは  
あふふのつらふはあふふのつらふはあふふのつらふは  
あふふのつらふはあふふのつらふはあふふのつらふは

狂云北草平正月の祝詞ニテ鳥追ト云者ノ曲辰民ハ  
ヲ云イテク唱事ナリ其者ハ昔シ詭経者ト云テ逢坂  
禊凡ノ流ヲ汲テニ井ノ近松院ヲ本寺トセリト今依々羅  
ト云者ナラン然レニ此公偏ノ分明ナラス早凡ノ者ノ習上傳

身正馬ノ語ニアラテ世ニ云フ武蔵坊弁慶ヲシホニ  
ト句讀セル如ク口授ノ違イ多クラン去レト此公寺ノ文ニ  
ヲ思九向シテ定ムキニモ非ス其ニ且六文ヲ中畧シテ  
法格ノ外ノ風雅ヲ知レトナリ去ルハ五七ノ語路モナク假名  
ノ配モナクニ向長短ノ和子モナキニ純ニ風雅ノ情ヲ見レ  
此等ヲ辭ノ文鑑トセハ文草ノ家ノ活計ナランナリ去レ  
此式ノ林手ニ庭ニモアルニヤ一聽内所ノ沙汰ニ及ビ中牧ハ井田  
ノ法ヲ云ル但シハ迎吉宮上ノ淳朴ニシテ上古ノ作文トハ  
見エタリ然レテ結語ノ妊婦ヨリ不意ニ仰法ノニ子云ル  
妊婦ノ内々ノ祝詞ノ仰法ハ彼カ常語ナリト見ルニ





毛浅尚敷ハ遠ク箴テ近ク慎サテヤ然リ色ニ遊ヘクテ  
 色ニ漂フカラストハ肉雖ノ意モ此更ナレシ但シ巴静ハ大田  
 氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス妻生ハ濃ノ竹ノ竈ノ産ナリ  
 トフ

